

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

2022年2月27日（日）

黒田 禎一郎

説 教：「もし、光の中を歩むならば」

—恵みと成長—

テキスト：第一ヨハネの手紙1章5～7節

はじめに

- ・民主主義国家である日本では、宣伝広告が実に盛んであります。
民間テレビやマスコミは、スポンサーで成り立っています。宣伝広告（コマーシャル）で、スポンサーはよくイメージ・キャラクターを用いますね。有名人や人気俳優さんが、宣伝・広告をすれば、その商品の売れ行きは抜群に変わります。
- ・逆に、イメージ・キャラクターが問題を起こし、スキャンダル等を起こすならば、スポンサーにとっては大打撃となります。それらは、イメージ効果のプラスとマイナスです。どういうイメージを与えるか、宣伝広告は戦いの中にあると言えるでしょう。人間にとって、イメージは大きな働きをします。
- ・ところで皆さんは、神についてどのようなイメージをお持ちでしょうか？
私が言う神とは、もちろん天地万物をお造りくださった創造神のことです。世界を造られた神を見ることはできるでしょうか。イメージ・キャラクターはいるでしょうか？　もし、神を物理的に見る如果能够ならば、どうなるでしょうか。少し考えてください。
- ・仮に、創造神がここに姿を現されるとするならば、この会堂にはどれほど多数の方々が押し寄せてくることでしょうか。きっとパニック状態となるに違いありません。
- ・しかし、神がそのような物理的な姿で現れてくださったのは一回だけでした。それはイエス・キリストでした。聖書は次のように述べています。
1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。　ヨハネ
- ・そしてイエスは言われました。
14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。　ヨハネ

人となられたイエス・キリストこそ、神の御子であります。

ヨハネはそれを自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の手で触れたのでした。そのヨハネは、神についてヨハネの福音書で次のように言いました。

4:24 **神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。** ヨハネ

- またヘブル人への手紙には次のように書かれています。

12:29 **私たちの神は焼き尽くす火なのです。** ヘブル

- このように、私たちは聖書を通して、イエス・キリストを通して、神というお方のイメージを持つことができます。ヨハネはこの書簡（第1ヨハネの手紙）において、神について2つの使信を述べました。

① **神は光である** (1:5) : 1章、2章

② **神は愛である** (4:8) : 3章～5章

- そこで、私はこれからヨハネが説いた神について、皆様と一緒に学びたいと思います。 3点

大切なポイント

1. 神は光です

1:5 私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。

- ヨハネはヨハネ福音書において、こう言いました。

1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

- ヨハネは、神は光であり、「闇はこれに打ち勝たなかった。」と述べました。そして第一ヨハネ1章1節では、「**神には闇が全くないということです。**」と言いました。ここで使われている「光」は、光源を表すギリシャ語の「phos」(フォス)です。反射光 (pengos:ペンゴス) ではありません。私たちには、その「光」(フォス)は理解しがたいものです。

- 話は変わりますが、私たちは夜と昼の区別のない時代に住んでいます。昔まだ電気が無かった時代、町(村)全体の明かりは消えて暗闇に包まれました。その頃は昼と夜の違いははっきりとしていました。しかし、今は夜にできることと昼間にできることとの区別がなくなりました。
- 電気を使えるようになって生じた最大の変化は、太陽に対して考えたり、感謝したりしなくなることと、言われます。日が昇る夜明けに対する期待

感がなくなりました。太陽に対するありがたみを失い、日の出を待ち望む期待感も少なくなりました。（人間の体は、本来太陽とともに起きて、太陽が沈むとともに休息に入ることである。と聞きますが、人間の生活リズムが変わりました。）

- それと同じように、私たちは神を望まなくなりました。この地球を照らす光は、太陽から来ることを忘れてしまったように、人生を照らす光は神から来ることも認めてなくなりました。24時間、電気オンの生活で、24時間神がいなくても大丈夫と考えるようになりました。
- さらに言うならば、神なくして生きる方が人間らしく生きられると考えるようになりました。それは人間の傲慢であり罪です。太陽は人間が存在するための存在の根源です。地球に存在するものは、どれほど太陽に依存しているでしょうか。（それについてはもう説明は不要でしょう。）
- それでも、神はそのような人間に太陽の光を送ってくださっています。

- 光と闇、それはまったくの別世界です。ヨハネは創造神を知らない世界を、「闇」の世界とおき、それとは対照的な世界を「光」とおきました。そしてこう言いました。

1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。ヨハネ

- 闇の世界にあるものを罪とおき、罪と正反対の世界を光とおきました。神はきよさそのものであり、私たち人間のように「闇」、すなわち汚れが混ざった部分など一つもない存在であります。しかもヨハネは、この真理をイエスから直接聞いて、伝えているのです。
- そこでヨハネは、この書簡を読む者が各自の生活に当てはめて点検してみるように勧めています。1章6節以降では、「もし」という条件文が何度も出てきます。そして次の2つの「もし」は、外側に現れた「歩み」を点検することによって、内側の「神との交わり」の有無を確認することができます。

2. 光の道を歩みなさい

1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。

- 皆さん。まずはじめの「もし」という問いかけは、私たちの歩みについてです。この聖句（1:6）をよくお読みください（もう一同読みましょう）。
- 6節は、何を尋ねているかといえば、神と交わりがあると言いながら、すなわち「言っていること」と正反対の「歩み」をしているなら、それは偽りを言っているということです。

- ・もし、私たちが片方で神と交わりがあると言いながら、すなわち口では自分はクリスチャンだと言い、教会にも行き、キリスト教的知識も多く持ち、また洗礼も受けていると言います。しかし片方の日常生活では、罪を犯し、汚れた生活をしているならば、それは「やみ」であると言います。しかもそれは神の前に真実ではなく、偽りであるということです。
- ・ヨハネはこの問いを「もし」という言葉で尋ねています。
皆さん。このような危険はヨハネの時代だけではありません。今日の日本でもありうることです。教会の中での自分と家庭や職場での自分、同じ自分です。しかし違うのです。月曜日から土曜日までの自分と、日曜日の自分、同じ自分ですが違います。建前としての信仰と本音の実生活が食い違うことです。
- ・ある方が、「日本の社会では、表と裏を器用に使いわけていかねば、生きていけない。」と言いました。つまり二元論です。しかし考えてみれば明らかです。人は本当の意味でそのような人を信頼するでしょうか？ いいえ、本音では表と裏がある人を嫌います。ですから、あの人とは一緒にやれない。難しいと、考えます。（その際、自分のことは考えていません）

『例 話』

- ・新しい事業を始めるということは、困難が伴うものです。そのような中で、聖書の言葉に励まされて会社を創業した人が日本にもいました。彼らはみな聖書の言葉に支えられていました。エンジェル・マークでお馴染みの森永製菓創立者の森永太一郎氏も、聖書の出会いが人生を大きく変え、今の会社を建てる機会となりました。
- ・1865年、森永太一郎氏は佐賀県で生まれました。彼は6歳で父を亡くし、親戚の家を転々として育ちました。12歳まで、読み書きも自分の名も正しく書けないほどであったそうです。彼はいろいろな仕事をしました。苦勞して学び、彼は破産した自分の陶器会社の負債をかかえ、その再建のために米国に渡りました。
- ・全てを失う中で森永太一郎氏を救ったのがキリストの福音でした。彼は米国でイエス・キリストの福音を聞き、キリスト者となり洗礼を受けました。そこで彼は天使が森永太一郎の命を救った姿を会社のマークとしました。米国で食べたお菓子を日本の子どもたちへ思い、西洋菓子の製法を学び帰国しました。

- ・彼は神様のために仕事をするのだと、菓子を積んだリヤカーに大きく「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」（Iテモテ1:15）と記して売り歩きました。人からは「耶蘇（やそ）の菓子売り」と冷やかされながらも、リヤカーを引く姿がありました。
- ・その「志し」は人の心を動かし、良き協力者も与えられ、形となってゆきまです。会社が軌道に乗りかけた1923年、関東大震災が発生しました。彼は社員の反対を押し切って、被災された人々に倉庫にあるお菓子を無料で配りました。かつて自分が助けられた慈善の心、キリストの心に突き動かされたのでした。
- ・その後、彼は多忙となり、一時はキリスト教信仰から離れましたが、晩年「私は罪人のかしらです」と語り、キリスト信仰に復帰し、罪の赦しである「キリストの福音」を説いて、全国を回り71歳で天に召されました。
- ・森永太郎氏の人生は、じつに波乱の生涯でドラマのようです。事業の倒産を機に渡米し、そこでクリスチャンとなり洗礼を受けて帰国し、エンジェルマークの森永製菓を創業しました。そして晩年は、みことばのように光の道を歩いた人でした。
1:6 もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。
- ・ヨハネは「もし」と問いかけました。

3. 光の子どもらしく歩みなさい

- 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。
- ・ここに二つめの「もし」があります。まず覚えたいことは、神は光であると同時に「光の中におられる」お方であることです。そこで「もし」私たちが光の中を歩むならば、生活全体に光があるならば、きよさを内に持つということです。
 - ・真の「光」（フォス）と共にいるならば、私たちの生活は新しくされ、私たちの内側に神の性質が宿るようになります。それは世間の生き方とは違うものです。

1) 光の中を歩む人の特徴

- 私たちの実生活は、神との隠れた交わりを表すものです。
1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。
- 光の中を歩む人の特徴の一つは、互いに交わりがあることです。
では、どうすれば「神の子どもらしく歩むことができるでしょうか。神を信じるクリスチャンも人間として、過ちを犯します。時には失望することもあります。
- しかし、それが問題ではありませんでした。問題は、過ちを犯した後、それをどのように解決したかです。ヨハネは「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」と述べました。
- 世界で一番はじめのキリスト教会はエルサレムでした。彼らは教会に集い、互いに深い交わりがありました。それは主が臨在された幸いな交わりでした。

2) イエスの血の力

- ヨハネは「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」と述べました。そこにキリスト者が勝利を得る秘訣があります。十字架で流されたキリスト・イエスの血とは、どんな力があるのでしょうか。

① キリストの血は生涯にわたり力を持つ

この7節のみことばは意識すると、「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめ続ける」ということです。救われた時だけではありません。救われた後も、年老いてからも、いつでも十字架のもとにいくならば、罪の赦しの解決があります。

② 「すべての罪から」私たちがきよめる

心の中に染み付いている頑固な汚れも、自分ではどうすることもできない罪の拘束力も、御子イエスの血によって解決されます。

③ キリストの血は恵みの内に成長させる力がある

- 明るい光の中を歩めば歩むほど、人は自分の汚れに気づくものです。以前は分からなかった自分の姿に気づき、悲しみます。しかし、その時イエス・キリストの十字架を仰ぐならば、罪赦される経験をします。そしてキリストの御血の恵みの深さを覚えるのです。
- 聖書はこう語っています。

5:20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。 ローマ

ま と め

説 教：「もし、光の中を歩むならば」

—恵みの成長—

- ・ 神は今朝も私たちにお語りくださいました。神を信じる人は二元論保持者であってはなりません。それは神の恵と祝福を失う道です。神のまことの願いは、罪が赦された聖徒として勝利の生活を歩むことです。
- ・ かつてヨハネはイエスの直ぐ側で、イエスを観察しました。このお方こそ、神が人となり現れてくださったメシア（救い主）であると知りました。その彼がこの書簡を書き送り、「もし、光の中を歩むならば」と尋ねました。それが今日の主題です。
- ・ 私たちに求められていること、それは光の子どもらしく歩むことです。その秘訣はイエス・キリストにあります。ヨハネはこう言いました。
1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。
- ・ 私たちも、光の中を歩みましょう！

* God bless you!